

# 西の湖における水草の現況調査

幡野 真隆・井戸本純一

## ◆背景・目的

主要な淡水真珠漁場として重要な西の湖では、水草の異常繁茂し、漁場悪化の大きな原因となっている。そこで、過年度から水草現存量のモニタリングを行っており、今年度も同様に調査を行った。

## ◆成果の内容・特徴

- 過年度の調査から西の湖において水草が最も繁茂するのは9月期であったことから、2006年9月19日に湖内15地点において採貝用鋤簾(間口20cm)を用いて各店2mの距離内(面積0.4m<sup>2</sup>)の水草を採取した。
- 1m<sup>2</sup>あたりの現存量(湿重量)は15地点平均で14.6g/m<sup>2</sup>(最大134.8g/m<sup>2</sup>、最小0g/m<sup>2</sup>)と昨年度(平均1,809g/m<sup>2</sup>)と比較して大幅に減少した(図1)。
- この水草の大幅な減少について検討を行ったところ、西の湖の水温は平年は5°Cを下回ることはないが、2005年12月から降雪が多く、12月には1.6°C、翌年1月には3.2°Cと平年よりも大きく下まわっていた。昨年まで西の湖で繁茂していたオオカナダモは南米原産であり、日本国内での分布も比較的南に多いことから、低水温への耐性が低く、昨冬の水温低下が現存量の減少に大きな影響を与えていたと考えられた。
- さらに、今年度は水草刈り取り事業が春から継続的に行われており、40トンあまりの水草が除去され、その影響も大きいと考えられた。
- 水草繁茂量の減少に伴い、イケチョウガイの良好な生息環境の指標であるクロロフィルa濃度は昨年度までは夏に低下していたが、今年度は夏にも高く維持されていた。そのため、今年度のイケチョウガイの成長は良好であった(別報告参照)

## ◆成果の活用・留意点

- 水草の減少により、良好な真珠漁場の復活の兆しが見られたので、今後も水草現存量のモニタリングを行い、水草の除去等の漁場管理に資する。

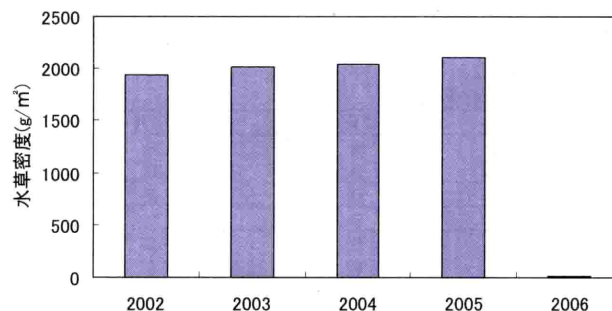


図1 9月期の水草現存量の変化